

「生きて働く読解力」の育成を目指す指導法の研究

筆者の考えを追究する子どもを育てる説明的文章の指導
～問いを見だし、解決する活動を通して～

福岡県筑後地区小学校国語研究会 顧問 松澤 文人

はじめに

第15年次の研究紀要には、中堅教諭の朝倉市立三奈木小学校の矢野裕紀先生の「書くこと」の学習「たから島のぼうけん」（光村図書）を紹介した。

今回は、うきは市立山春小学校の新進気鋭の永松あい先生と本年度共同研究している説明的文章の読みを紹介する。8月に中間報告を行った。まだまだ研究の途中であり、課題は山積しているが、この中間報告での課題をもとに、来年の2月に研究発表を行う。課題としては、問いの解決による汎用的な力の習得である。2学期には5年「固有種が教えてくれること」（光村図書）の実践で、説明的文章の系統的な指導を明らかにし、研究を深化させたい。

1 主題の意味

(1) 「筆者の考え」とは

説明的文章において、文章構成、事柄、表現を用いて、事実や事例を基に、筆者が読者に最も伝えたいことである。

文章構成とは、「問い－答え」や「頭括型」「双括型」「尾括型」などの関係を明確にした、「はじめ－中－終わり」「序論－本論－結論」といった三部の文章の組み立てのことである。事柄とは、筆者の考えを主張するための説得力をもたせるために用いた事実や実験結果などの具体例である。表現とは、つなぎ言葉や繰り返し使っている言葉、比喩や反復、倒置、体言止めなどの技法について、文章の内容を伝えたり、印象付けたりする上で工夫した言葉のことである。

(2) 「筆者の考えを追究する」とは

これまでに身に付けた文章構成、事柄、表現の仕方などの読み方を生かしながら、筆者の考えを捉え、要旨をまとめることである。

追究するとは、これまで学習した文章構成や事柄、表現の仕方（どのような内容をどのような方法で書き表しているのか）を基に、筆者の考えを捉え、要旨を自分でまとめることである。筆者の考えを追究する子どもの3つの資質・能力から以下のように具体化した。

- 説明的文章を読み、文章全体の構成を捉えるために、各段落の内容の中心となる事柄や筆者がどのような事実を理由や事例として挙げているかに着目して、事実と意見の関係についてとらえる子ども
- 説明的文章構成や事柄、表現を手がかりにしながら、目的に応じて文章と図・表などを結び付けるなどして筆者の考えを解釈し、自分で要旨をまとめることができる子ども
- 説明的な文章を読み、分かったことや考えたことを話し合ったり文章にまとめたりして、複数の文章や情報を関係付けて検討し、自分の伝えたいことを伝えることができる子ども

2 副主題の意味

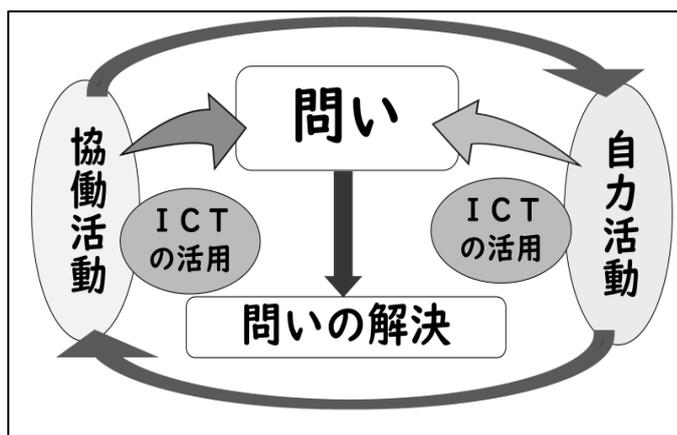
(1) 問いとは

説明的な文章において、「何が書かれているか」「どのように書かれているのか」「なぜそのように筆者は書いたのか」に着目し、文章全体の中で筆者が一番伝えたいことに対する疑問のことである。

(2) 「問いを見出し、解決する活動」とは

教材文を読み、問いに対して、①題名と内容の一致、②文章構成、③事例のあげ方、④言葉の使い方の視点から要旨を捉え、筆者が伝えたいことに対して自分の考えをまとめる活動である。

問いを見出し、解決する活動では、「自力活動」「協働活動」の2つの活動を位置付ける。まず、自力活動において、問いに対する自分なりの考えを作る。さらに、個人での活動（自力活動）、ペア活動、4～5人のグループ活動（協働活動）にわかれ、①～④の観点から問いを解決し、まとめる活動を行う。この活動では、ICTを活用しながら、いつでも自分の考えや友達のことを交流、付加修正することができるようにする。



3 研究の目標

説明的文章の学習において、筆者の考えを追究する子供を育てるために、問いを見出し、解決する活動の内容や方法の有効性を明らかにする。

4 研究の仮説

説明的文章の学習において、「何が書かれているか」「どのように書かれているのか」「なぜそのように筆者は書いたのか」という観点に着目し、問いを見出し、①題名と内容の一致②文章構成③事例のあげ方④言葉の使い方の視点から問いを解決する活動を位置付けることで、筆者の考えを追究する子どもを育てることができるであろう。

5 研究の実際（第5学年 単元「言葉の意味が分かること」指導者 山春小学校 永松 あい <本時のねらい（11/12時）>

○筆者の事例の提示の仕方や文章の組み立て、筆者の主張が書かれてある段落から視点を見直し、中心となる「面」「広がり」「言葉の意味」の言葉から、要旨をまとめることができる。

○自分がまとめた要旨について見直しカードを使って交流する活動を通して、中心となる文や言葉を取り出して付加修正したりしながら、筆者の考えを追究しようとする。

<つくる段階>

○グループ評価（協働活動の位置付け）

- ・自分が書いた要旨の課題を把握するための協働活動の工夫



【課題】
筆者が伝えたいことをまとめた要旨になっているか

グループ評価の視点
○考えがよく伝わるか
○読みの視点が入っているか
⇒良いところ、改善点のアドバイス

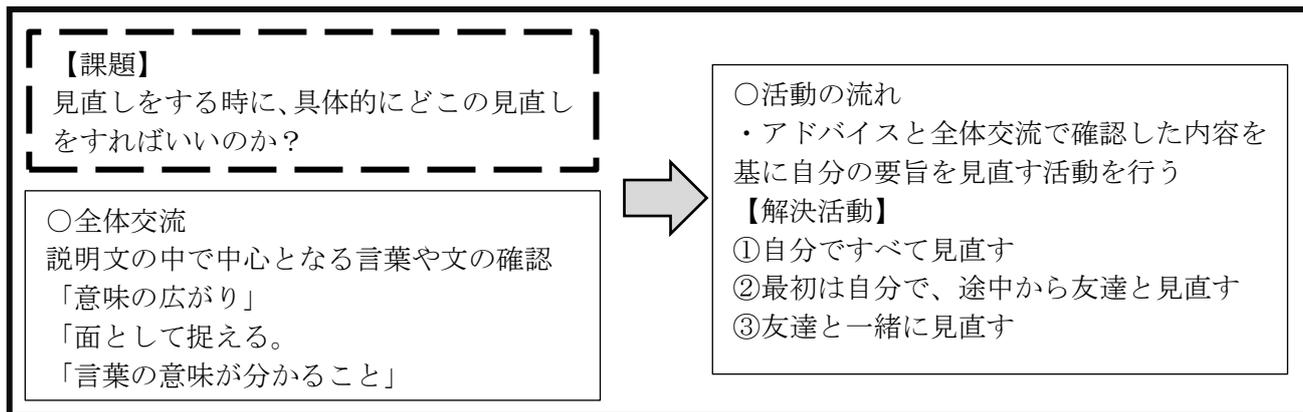
<つくる段階>では、前時の自力活動で書いた自分の要旨の内容が「筆者が伝えたいこと」としてまとめられているのか、また筆者が伝えたいことは何かという問いから、要旨の見直しを行った。その際に、協働活動を位置付け、グループ評価を行った。資料4の評価シートを用い、視点の確認、アドバイスをを行った。お互いのタブレットで要旨を共有し合うことで、だれがどのような読みの視点で要旨を書いているのかを確認することができた。友達の要旨を互いに確認することで、自分の要旨との違いに気付き、友達の要旨の良さに気付くことができた。「最後の段落の文章から抜き出していてよかった」「言葉の意味を説明しているところがよかった」などの良さに気付き、良さを伝え合うことができた。

アドバイス	見えカード①〇〇△	名前()
	考えがよく分かる	

【資料4】評価シート

<ふかめる段階>

○要旨の見直し（自力活動の位置付け）



<ふかめる段階>では、<つくる段階>でのアドバイスを基に要旨の見直しを行った。しかし、すぐに見直すことが難しい子もいるため、全体交流の場を設定し、「要旨」を書く時に大切にしていたことの振り返りを行った。資料5の要旨カードを提示し、要旨をまとめるときのポイントである「繰り返し出てくる言葉」「筆者の主張から」「キーワード」から、中心になる言葉や文の確認を行った。確認を行うことで、自分の要旨に中心になる言葉や文が入っているかの見直しの視点として有効であったと考える。

要旨・・・筆者が最も伝えたいこと。
(筆者が文章で取り上げている内容の中心となる事がらや、それについての筆者の考えの中心となる事がら)

<要旨をまとめるときのポイント>
○まとめや筆者の主張から筆者が伝えたいことを見つける。
○くりかえしの表現や文末の表現に着目する。
(文末の表現・強く言い切っている表現など)

【資料5】要旨カード

全体交流のあと、要旨の見直しである自力活動を位置付けた。

自力活動では、ICT活用を行った。ICTを活用することにより自分の要旨の中で必要なところ、不必要なところをすぐに見付け、付加修正を行うことができたことから、子どもたちにとってICTを使った要旨の見直しは有効であったと考える。要旨の見直し活動では、①自分ですべて見直す、②最初は自分で、途中から友達と見直す、③友達と一緒に見直すの活動を自分で選択し、活動を行った。要旨の見直しの見通しが立っている子は①、②を選択し、自分での見直しが難しい子は③を選択し、要旨の見直しを行った。自力活動を位置付けたことで、問いであった「筆者が伝えたいことは何か」について、追究する姿が見られた。追究する姿は見られたが、具体的な付加修正のイメージがなかったため、中心となる言葉や文が入っている、入っていないという見直しにとどまり、よりよい内容への付加修正を行うことができなかった。このことから、次時では、以下の活動を行った。



【資料6】ICTを活用した要旨の見直しの様子

<次時での活動>

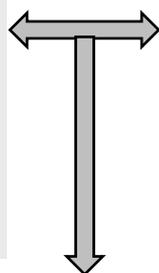
- 教員が提示した要旨と自分が書いた要旨を比較する活動
 - 比較した例示を基に、自分の要旨を付加修正する活動

子どもたちの要旨を見直したときに、事例だけのまとめになり、筆者の考えが入っていない要旨や不要な説明が入り、字数を守れていない要旨が多くあった。そこで 資料7のような要旨を提示し、細かい事例（コップ、言い間違いなど）の説明の有無や、「点」の説明の有無について考える活動を行った。

【資料7】教師の要旨を例示

言葉の意味が分かることは、想像以上におく深いことだ。コップのように、一つの言葉がさすものの中にも色や形、大きさ、使い方などさまざまな特徴を持ったものが含まれる。かむとふむをまちがえるのは、自分が覚えた言葉を別の場面でおうとしてうまくいかなかったからだ。日本語と外国語の表現が違うのは、英語の感覚で「食べる」を使ったからだ。このように言葉には広がりがある。

筆者が伝えたいことは、言葉の意味を「面」として考えということだ。言葉の意味を、「点」として考えることは、物や様子、動作と、言葉とを、一対一で結び付けることであるということだ。そんなとき、「言葉の意味は面である」ということについて、考えて見てほしいのだ。



- コップの事例や言い間違いの事例は、あくまでも事例であって、筆者が伝えたいことを説明するためのものである。
- この要旨だと筆者が本当に伝えたいことが伝わらない。
- 筆者は「面」が大切であるといっていたから、「点」の説明は必要ないのではないか。

このような例を提示したことで、要旨をまとめる上で必要な言葉、必要でない言葉について気付き、自分の要旨との比較材料となった。

その後、例示と比較した上で、自分の要旨の付加修正を行う、自力活動を位置付けた。

資料8は例示を基に自分の要旨を見直したA児の要旨の変化である。A児は、比較前は「点」の説明を要旨に入れていたが、比較後は「面」の説明と事例が何を伝えたかったのかという2つの点に注視し、要旨をまとめることができた。

このことから、資料7のような修正が必要な要旨の例示を出したことで、自分の要旨の不十分さに気付くことができたと考えられる。

【資料8】比較前後の要旨の変化

筆者が伝えたいことは、言葉の意味を「面」として考えということだ。ふだん使っている言葉の見方を見直すことにつながる。そして言葉の意味を、「点」として考えることは、物や様子、動作と、言葉とを、一対一で結び付けることであるというところだ。そんなとき、「言葉の意味は面である」ということについて、考えて見てほしいのだ。

筆者の伝えたいことは「言葉」を学ぶときには、言葉の意味を面として理解することが大切だ。それは三つの事例には意味の広がりはないことが書かれている。そして「面」とは意味の広がりや意味のはんいということである。これらのことから、言葉を適切に使うためにはそのはんいを理解することが大切だと分かる。

比較前の要旨 → 比較後の要旨

6 成果と課題

○要旨を付加修正する活動において、修正が必要な要旨を教師が提示したことで、自分が書いた要旨と比較することができ、よりよい要旨に修正することができた。

○要旨を書く活動においてICTを活用したことにより、自分の要旨を簡単に修正することができ、子どもの書く意欲にもつながった。

●筆者の考えを追究する活動において、読みの4つの視点を提示し、要旨を読み取ることはできたが、要旨に対して自分の考えを書くまでに至らなかった。